

2017年2月26日(日)／緑ヶ丘保育園卒園児親子礼拝

説教:「わたしの助けは来る」

聖書:詩編121:1～8

詩編121編の言葉に「目を上げて、私は山々を仰ぐ。私の助けはどこから来るのか」と、詩人は語っている。この詩編は人生の旅路の詩。「山」は、人生における苦難をいう。私たちの人生は、よく「山あり谷あり」と言うが、この詩人は人生の旅路の中での不安な時のことを先ず歌ったわけだ。「目を上げて、私は山々を仰ぐ。私の助けはどこから来るのか」と。山は、一つ越えてもまた山が現れる。その山々を見てしまうと途方にくれてしまうもの。でもこの詩人は言う「私の助けは来る、天地を造られた主のもとから」と。旅の行く手を立ちをはだかるかのように険しい山々が並び、その山々におびえる中で、私の神は、その山々をも造られたのだ。それは、この山、この苦難は、神の御手の中にあるということ。その思いに立ち帰り、私の苦難と共に歩んでくださる神を覚えて、人生をあきらめることなく、一步、一步と歩み、時に休みながら、立ち止まりながらも、また一步、歩んで行く。一人ではない、一緒に歩んでくださる方が居られる。そのことを先ず、このところから覚えたい。

次に、「どうか、主があなたを助けて／足がよろめかないようにし／まどろむことなく見守ってくださるように…」ここは、あなたが苦難の中にある時に、実はあなたのために祈り、心配している方がいると言っている。私たちは一人で人生を歩んでいると思いがち。一人で何もかも頑張ってきたと思うことはある。しかし、決して一人ではない。必ずあなたのことを思って祈っている方がいる。そのことを聖書は教える。

幼い子どもが一人で学校へ行く時、親は、その子のことを思って祈っている。ちゃんと学校へ行けているのか、勉強は出来ているのか、友達と仲良く出来ているのかと、心配は尽きない。親が子を想う気持ちと同じように、天の神は、私たちの事を愛し、見守ってくださっているのである。「…主がすべての災いを遠ざけて／あなたを見守り／あなたの魂を見守ってくださるように」と、私たちは、祈られているのである。

新生讃美歌に「たとえばわたしが」という歌がある。

たとえば私が(人生に疲れて)歩けなくなっても…

たとえば私が 道を外れて(しまって)も…

たとえば私が(悲しみにふけて)涙を流す時も…

たとえば私が 独りになっても・・・

私を慰め 励ましてくれる(方がおられる)

イエス様とともに 歩き出す時に、あなたも気づくでしょう もう一つの足跡(を)・・・

ともに生きる喜び かみ締めながら歩いてゆく(時・・・)

私のそばにはいつも もう一つの足跡(がある)・・・

もう一つの足跡に気づく人生は、慰めに満ち、励ましに満ち、勇気に満ちて行く。聖書は、
私たちにそのことを教えている。私の助けはもう来ているのである。(神谷)